



日本文学に現れた「弥勒信仰」について-その救済の論理を中心に-

李, 瑛雅

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

1999-03-31

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲2022

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1002022>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・(本籍)	李 ^イ 瑛 ^{ヨン} 雅 ^ア (韓国)
博士の専攻分野の名称	博士(学術)
学位記番号	博い第312号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与の日付	平成11年3月31日
学位論文題目	日本文学に現れた「弥勒信仰」について —その救済の論理を中心に—

審査委員	主査 教授 池上 洵 一
	教授 野口 武彦 助教授 福長 進

論文内容の要旨

要旨

弥勒信仰は古く仏教公伝のころから盛んに信仰されてきた。そのような弥勒信仰は古代日本の文化を理解するうえで、大変重要な意味を持っている。それは古代文化の理解に有益なだけでなく、古代日本文学の捉え方にもかかわってくる重要な手がかりとなる。

第一章では、聖徳太子伝のなかでも、『聖徳太子伝補闕記』を採りあげた。『聖徳太子伝暦』などをはじめ諸太子伝で観音菩薩の化身として捉えられている太子像が『聖徳太子伝補闕記』では弥勒菩薩として捉えられている事実に着目する。先行研究では、『聖徳太子伝暦』の太子観音化身説は『聖徳太子伝補闕記』からの影響であるとしていた。が、『聖徳太子伝補闕記』の編者は太子を仏または菩薩として捉えていて、それは弥勒信仰の投影である。本章では『法華経』における東方観、慧慈の浄土観、蜂岡寺縁起譚についての考察を通して、弥勒菩薩としての聖徳太子のイメージを明らかにした。

第二章では、東大寺の初代別当良弁の説話をとおして南都仏教における弥勒信仰の特徴を考察した。良弁は『日本霊異記』の「執金剛神霊験譚」の金鷲優婆塞で知られているが、先行の研究では、この説話を東大寺建立譚という視角で捉えられてきた。そもそも、良弁に関する伝承自体が先行の研究の対象からはずされてきたことにも原因があって、本話における弥勒信仰の反映という視角はみのがされてきた。本稿は、この説話では、弥勒信仰が反映されていることを『大唐西域記』の記事によって明らかにした。そして東大寺建立譚に金峯山の蔵王権現の伝承が関わってくる原因を良弁の弥勒信仰を通して考える。そして、兜率天の外院とよばれるほど、平安時代の弥勒信仰の聖地である笠置山の笠置寺縁起譚に良弁が結びつけられる意義を法相宗と山岳信仰との密接な関係から論じた。

第三章では、天台宗における弥勒信仰を最澄と円仁そして円珍の信仰態度から考察する。奈良時代は弥勒信仰は主に法相宗によって重んじられてきた。法相宗はその救済の論理において五姓各別を説き、無性有情(絶対に救われない者)の存在を認める。一方、一切衆生悉有仏性を説く天台宗はすべての存在の仏性を認める無差別の救済の論理を提唱した。相反する救済の論理をめぐって両宗派は激

しい対立をみせるが、法相宗の救済論理は弥勒信仰をとおして具現した。それでは、天台宗の救済論理によって弥勒信仰は完全に衰退したかといえば、決してそうではなかった。祖師最澄の場合は、空海宛の書簡文のなかで、弥勒浄土往生の願がみえる。また、出家後、初めての仏法の修行の道場が弥勒信仰の聖地崇福寺であり、比叡山の入山の決心を語った「願文」では世の無常観を「慈尊月未照」という言葉で示している。また、最澄は入唐前、香春神社で法華経を講読したのだが香春神社の神格は弥勒信仰が反映されているからそれは『法華経』の弥勒信仰であると推察してみた。『法華経』「普賢菩薩観発品」によれば、『法華経』読誦の功德の利益の一つで兜率天往生が説かれている。これによって、天台宗における弥勒信仰は、法相宗の瑜伽論を中心にした救済の論理とは別の形すなわち「法華一乗」による無差別救済の論理の信仰として新しく展開していく。

円仁の『入唐求法巡礼行記』は中国の仏教界の事情をよく伝えるが、そのなかでは、弥勒信仰の記事が多数収められている。それに、新羅人の信仰の道場である赤山法花院の記事を手がかりとして比叡山の赤山禅院の建立は円仁の弥勒信仰による発願によるものと捉えた。最澄と円仁の弥勒信仰は天台宗が所依經典にする『法華経』「普賢菩薩観発品」により、あくまでも弥勒信仰は最澄と円仁において個人的な信仰として受け取られていたと思われる。

しかし、天台宗における弥勒信仰の受容の仕方は円珍に至ると性格が大きく変わってくる。つまり、園城寺縁起譚では園城寺が弥勒仏の聖地であり、弥勒仏の化現である教待が寺地を円珍に譲ると記している。円珍に至るともはや弥勒信仰は個人の信仰を越えて園城寺の中心信仰にまで発展するのである。円珍における弥勒信仰の態度は最澄と円仁のそれとは大きく変るが、その原因の一つとして真言宗の影響を考えられる。空海の真言宗は弥勒信仰を重んじるが、円珍の母が空海の姪であることと円珍が天台密の成立者ということからその原因を考察した。

なお、天台宗の弥勒信仰は最澄をはじめ円仁、円珍共に新羅弥勒信仰との繋がりが推測できるが、それは古代仏教文化の国際性を示唆するのである。

第四章では、『今昔物語集』に現れた弥勒信仰を特に『今昔物語集』の救済の論理において考察する。『今昔物語集』が編纂された時代は仏法が滅びる末法の時代である。人々はそれぞれ自己の救済の問題に深刻に直面するが、従来の『今昔』の研究においてはこのような人間像をもっぱら浄土教との関連で論じてきた。しかし、時代の信仰は浄土教に限らない。『今昔』では弥勒信仰も真摯な救済の論理として捉えられている。人々はあるいは兜率天上生により、または弥勒下生の暁を待ちのぞみ、様々な善根功德を積んで末法の時代に自己の救済を祈る群像が『今昔』の中に描かれている。本章では、源信説話を特に採りあげて浄土教における弥勒信仰の受容の仕方について考察した。源信と勧学会の人々は兜率天上生に対しては否定的な視線を向けていたが、下生信仰については源信と慶滋保胤が共に「慈尊の業」を修行したことが具平親王の漢詩で記されている。『今昔』で源信は「往生譚」では兜率天上生は拒否するが、「関寺牛仏譚」では弥勒下生の値遇を願望する姿が語られている。

さらに、『今昔』の弥勒説話における救済の論理を検討し、極悪人の往生譚を収めている『今昔』の救済の論理は天台宗の「一切衆生悉有仏性」であることを明らかにした。

第一章から第四章まで、それぞれの説話と作品において考察してきた。弥勒信仰はまだ研究を深める余地がある。本稿での考察によって、その先行の研究から欠落していた部分が明らかにできたかと思う。

論文審査の結果の要旨

本論文は、奈良朝および平安朝の仏教説話を主たる研究対象として、日本における弥勒信仰の受容と変容の様相について、総括的な展望を得ようと試みた意欲的な研究である。当代の日本文学に関しては、浄土教すなわち阿弥陀信仰についての研究が盛んである反面、弥勒信仰については比較的等閑視されてきた傾向があるが、本論文はこのような状況の打破を志して、百済・新羅・高句麗の仏教の影響を色濃く受けた初期の聖徳太子伝、奈良東大寺の創建にからむ僧良弁の説話、平安前期の入唐僧円仁の『入唐求法巡礼行記』、平安後期の説話集『今昔物語集』を主要対象として、関係資料を広く調査し、分析を試みたものである。

聖徳太子の伝記は、平安中期に成立した『聖徳太子伝暦』が規範的な位置を獲得し、以後の伝承に決定的な影響を与えたが、論者はそれよりも早く成立した『上宮聖徳太子伝補闕記』の文脈が、それを引用する『伝暦』において微妙に改変されている事実に着目し、『補闕記』の文脈の正確な把握に努める。すなわち百済から渡来した仏教の内実、太子と関係の深い高句麗僧慧慈の浄土観、新羅の青年貴族集団「花郎」の弥勒信仰、太子と新羅とを結んだ山城太秦の蜂岡寺（広隆寺）の弥勒仏の縁起譚、『法華経』における東方仏の意味等、多方面から検討して、『補闕記』の太子像にはむしろ弥勒信仰の反映があり、『伝暦』以後の観音化身説は第二次的に発生した見方であると結論する。

従来ともすれば軽視されがちであった『補闕記』の記事に独自性を見出し、信仰史的にも注目すべき所以を説く本章は、着眼において非凡であり、高く評価することができる。

良弁をめぐる説話については、『日本霊異記』等に見られる執金剛神の霊験譚が、実は『弥勒大成仏経』の説く五体投地の行に通じる執金剛神悔過の霊験譚と見るべきであって、弥勒下生信仰に関係することを説くが、これも貴重な指摘である。

また、良弁が学んだ法相教学では『瑜伽師地論』、華嚴教学では『華嚴経』において、弥勒が占める位置の大きさを確認しつつ、東大寺大仏建立に際して金峰山に黄金を求めた説話、弥勒の聖地笠置寺の建立説話を通して、在来的な山神信仰が山岳修行者を介して弥勒と結合した様相を明らかにし、弥勒信仰の土着過程を追跡している。

日本天台宗の祖師たち（最澄・円仁・円珍）における弥勒信仰については、平安初期、一切衆生悉有仏性を説く天台宗と五性各別無性有情を説く南都法相宗とが厳しく対立したことを述べ、法相宗はまた南都仏教における弥勒信仰の中心であったが、この対立の図式を天台宗における弥勒軽視に置き換えて理解してはならないと論者は力説する。すなわち、天台宗においては、法華一乗による無差別救済の論理の中に弥勒信仰が組み込まれていた事実を、最澄においては空海宛の書簡、円仁においては『入唐求法巡礼行記』を例に詳細に分析して跡づけている。円珍については園城寺（三井寺）縁起説話を例に、弥勒が一寺の中心的信仰対象として受け入れられるに至ったことを明らかにしている。これらは日本仏教史の根幹にかかわる大きな問題であるが、大勢の把握に果敢に挑戦し、従来見落とされがちであった側面の照射に成功している。

『今昔物語集』の時代には、世は「末法」に入り、阿弥陀信仰が隆盛を迎えていたが、時代の信仰は阿弥陀にのみ収斂していたわけではなく、浄土教の旗手源信自身の著作においてさえ、とくに弥勒下生信仰には篤いものがあったことを多くの例を引きつつ論証している。『今昔』の弥勒説話をこの流れの中に置いて見る時、救済の論理において天台宗的な特徴が色濃く認められ、『今昔』を生んだ思想的環境は南都仏教ではありえなかったと説く。近年かまびすしい『今昔』南都設立説に対する一

つの反論として注目に値する。

以上、論者の研究目標は、あくまでも文学作品に現れた弥勒信仰の研究にあるが、仏教史的にも未開拓な分野であるため、文学資料のみならず仏教関係資料についても自ら博搜して懸命に読解を試みており、それだけに新鮮な問題提起にも成功している。取り扱う資料はすでに活字化されたものに限られるが、その限りにおいては群小作品にも目を配り、先学の研究にもよく目を配っている。惜しむらくは章によって到達度に若干のむらがあり、『今昔』の文学方法の把握等についてはなお途上にある感を免れないが、本論文の真価は従来の研究の死角を衝いて、日本文学における弥勒信仰の変遷史に新しい展望を確立したところにあり、この点においてすぐれた新研究として評価することができる。

以上の結果に鑑み、本審査委員会は論文提出者李瑛雅が博士（学術）を授与されるに足る資格を有するものと判定した。